


これがわたしの
旦那さま 3

市尾彩佳


Saika Ichio

RB

レジーナ文庫



登場人物紹介



ヘリオット▲

シングルドの近衛時代の
仲間です。第二の側近。
お調子者ですが実は策士。

ケヴィン▲

シングルドのいとこ従兄で、
第一の側近。
シュエラの後見人を
務める。

▲ウィルフレド

シングルドの異母兄。
先の戦争の際に
死んだと思われて
いたが……

エミリア▲

シングルドの王妃。
シングルドと実質
夫婦ではないが、
友人関係にある。

ラグム公爵▲

王国の三公爵の一人。
王妃の伯父で
自分の孫を王太子に
しようと目論む。



シングルド▲

23歳。ラウシュリッツ王国
国王。シュエラのおかげで
国王としての自信をつけ
つつあるが、シュエラに
想いが伝わらず悩む毎日。

シュエラ▲

18歳。貧乏伯爵家の
長女だったが、
国王のおしやう愛妾となる。
前向きな性格で、
シングルドへの想いを
隠しつつも彼を支える。

目次

これがわたしの旦那さま3

王太子の生還

次期王妃問題

おまけ 朝寝坊

8

268

359

7

これがわたしの旦那さま3

王太子の生還

1 闖入者

ラダム公爵イドリックは、王城北館——通称「王家の館」の二階にある自らの執務室にいた。

重厚な造りの執務机に肘をついて、頭をかきむしりながら悶々とする。

愛妾を陥れるために、後見をしている王妃エミリアに愛妾と同じドレスを贈った。一つの会場で同じデザインドレスを着た二人が揃えば、身分が上の者に対し下の者が無礼を働いたとみなされる。この目論みは大勢の貴族が揃う舞踏会会場で見事成功を収めたはずだった。事実、愛妾は非を認めてすぐすごと退散し、国王シグルドは齒噛みしつ

つイドリックをにらみつけた。それを見て清々したものだ。

追及されたら、逆に糾弾する予定だった。証拠はあるのか？ 愛妾の仕立て屋がデザインを盗んだのではないのか？ 愛妾のドレスこそ、王妃のドレスを真似て作らせたものではないのか？

この問題はこじればこじれるほど、愛妾の立場を悪くしていくはずだった。

ところが、愛妾が舞踏会で見せた振る舞いが貴族たちに「潔い」と好意的に受け取られた。その上、己の手の者が取り逃がした仕立て屋が王城に現れて、愛妾のドレスと同じものを作るよう依頼されたと白状した。

本来であれば、一平民の証言など取るに足りないものだ。ところがその仕立て屋は王城まで来て多くの者たちの前で泣きながら白状したため、その証言はあつという間に城内に広まってしまったのだ。

他に証拠もなかったため、それだけならばエミリアの評判が多少落ちるだけで済んだのに、愛妾は差し出がましくも和解を申し出て、エミリアもそれを受け入れてしまった。

王城内の庭を仲良く散策する二人の姿が見られるようになると、今度はエミリアのドレスは誰が用意したのかという話になり、彼女にドレスを贈ることが多いイドリックに密かに非難の目が向けられるようになった。

おのけ
公の場で取り沙汰されれば、いくらでも反論する用意があった。しかしシグルドはこの件を蒸し返そうとはしなかった。表向き舞踏会での不始末は愛妾のほうにあるということになっている以上、こちらからその件を持ち出せば、噂を気にする小者という印象を人々に与えてしまう。

こんなはずではなかった。

ラウシュリッツ王国の中で一番の権勢を誇っていた自分が何というザマだ。どこで何を間違えたのか。一度は国王をしのぐほどの権力を手に入れたというのに、国王と王子の死によって国政での発言力を削がれてしまった。その上小娘一人がシグルドの愛妾になっただけで、奴を追い落とそうとして弄した策略が悉く無に帰してしまった。

愛妾と仲良くするエミリアを叱りつけても、「仲のいいふりをして懐柔しているのですわ。そのうち伯父様に有益な情報を引き出してみせます」と言いながら、一向に報告をしてこない。

エミリアは何が気に入らないのか、昔から時折イドリックに反抗的になる。幼い頃は面会と称して彼女の両親である妹夫婦を王城に呼びつけ、イドリックの言うことを聞くよう言い含めさせていた。ここ数年は比較的従順であったが、あまり勝手なことをするようなら再び妹夫婦を呼ぶ必要がある。

だが今はそれよりも、シグルドの評価を落とすことが先決だ。しかし、いくら考えても名案が浮かばない。

このように思案に暮れること数日、イドリックのもとにある情報がもたらされた。

その情報を手に入れた貴族はおどおどと入室してきて、ためらいがちに報告してくる。それを聞いたイドリックは、椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がり、これ以上ないくらいに目を瞠った。

「それはまことか？」

「え……いえ、そうなのではないかという不確かな情報で、ですが公爵に報告をしないわけにはいかないと思い、その……」

イドリックは大きく手を振って吼えた。

「何としても捜し出せ！ 嘘かまことかは身柄を確保してから調べればいい！ 使える者は全て使って見つけ出すのだ！」

「は、はい！」

報告に来た貴族は、来た時と打って変わって、あたふたと執務室から飛び出していく。思いがけない報告に、そのあともしばし呆けたように立っていたイドリックは、やがて口元に笑みを浮かべた。

運が巡ってきた。
 身柄を確保でき、それが本物であったなら、これ以上の反撃に打って出ることができ
 きる。

「ふ……ふふ、ははは……」

イドリックの口元から不気味な笑い声が響いた。

エミリアと仲良くなつて三週間ほど過ぎた、ある日の午前。

この日は上天気だったため、外でお茶を飲もうということになり、シュエラの居室の
 前にある小さな庭へお茶の席を移す準備が始まった。

この庭は背丈より高い生垣に囲まれていて、王城の正面にある開けた庭園からは見え
 ないようになっていいる。生垣の根元には花々が植えられ、それ以外は一面芝生が敷き詰
 められていた。

この隠れ家のような庭を堪能しないのはもったいない。そういう話から出た趣向
 だった。

五人の侍女たちがテーブルと椅子を運び出したところでシュエラが叫ぶ。

「エミリア様！ そのようなことをなさらないでください！」

焼き菓子の入った皿を外へ持つていこうとしていたブラチナブロンドの女性は、淑女
 らしからぬ元気な動きで振り返り、シュエラに向かって美しい顔をほころばせた。

「あら。シュエラ様だつて手伝つてるじゃない？」

シュエラも、室内にあつた花瓶を運び出すべく手に取つたところだった。侍女たちが
 慌ただしくしていると、シュエラもついつい手伝いたくなつてしまふ。たまに手を出し
 かけてはシュエラ付きの女官であるマントノンに、「それは侍女の仕事です。主人であ
 るシュエラ様がして良いことではありません」と叱られる。だから常々気をつけてはい
 るのだが、うっかり手を出してしまつたようだ。

持つてしまつた花瓶をどうしようかと迷っていると、横からすつとマントノンの手が
 伸びてきた。

「お庭にお出になり、テーブルに着いてお待ちくださいませ」

白髪の混じつた茶色の髪を後ろできつちりとまとめたマントノンは、エミリアの前だ
 からかお小言は口にせず、花瓶を持つて一歩下がりに出るよう促す。

「エミリア様もです」

総白髪で顔に深い皺が刻まれた女官長のアンナも、エミリアから菓子の皿を受け
 取つた。

シユエラとエミリアは顔を見合わせて肩をすくめ、一緒に外へ出る。

「はしやぎすぎてしまったわ」

悪戯いたづらっぽく笑うエミリアに、シユエラも苦笑を浮かべた。

人柄ひとがらというものは、実際に会って言葉を交わしてみないとわからないものだ。

王妃エミリア。

幼少の頃より当時の王太子妃候補として王城で育ち、婚約までしたにもかかわらず王太子の死去によって、その後国王となった王太子の異母弟シグルドの王妃となった。美しく聡明で、国王シグルドより人望があるという。

舞踏会場で初めて出会った時は、噂うわさにたがわぬ美しい人だと思った。シユエラが自分と同じドレスをまとっていることに気付いた彼女は、ひどく青ざめ今にも倒れそうだった。

次に会った時——北館までシユエラが押しかけた時は、突然現れたシユエラに怯おびえていた。どちらの時も生気は感じられず、まるで人形のようにだと思つたのを覚えている。ところが心を開いてシユエラに接してくれるようになってから、彼女は生まれ変わったみたいによく笑うようになった。今までの気鬱きうつを晴らそうとしているかのようにしゃいで、一国の王妃とは思えないほど幼く感じることもある。

今もいきなりしゃがみ込んだので、シユエラは驚いて足早に近付いた。

「どうなさつたのですか!」

「この芝生、ふさふさで気持ちいいわ」

そう言いながら、芝生を手のひらで触っている。淑女がするようなことじゃない。

けれど緑に輝く細長い芝は見るからに気持ちよさそうで、シユエラも屈かがんで触ってみた。葉先がちよつとちくちくするけど、柔らかくてしつとりとした冷たさが心地良い。

「寝転んだらもつと気持ちよさそうね」

「あ、そうですわね」

エミリアの言葉にシユエラは相槌あいつちを打つ。すると背後でごほんとか咳払いをされた。

「や、やあね。やらないわよ、アンナ」

慌てて立ち上がったエミリアは、ばたばたとドレスのすそを払う。

そこに茶化す声が飛んできた。

「エミリア様のことですから、叱られなければ寝転ばれたんじゃないですか?」

「カチュア! 王妃様になんて口のきき方するの!」

けたけた笑うカチュアをフィーナが慌ててたしなめる。そんな侍女たちを見たエミリアは笑い声を立てた。

「あら、バレた？」

言葉を交わすまでは近寄りがたいイメージもあったのだけど、実際のエミリアは気さくで、気軽に侍女たちにも声をかける。

口元に手を添えてにんまり笑うエミリアに、シユエラはくすつと笑い声を漏らした。

「エミリア様ったら」

「あはははは」

「だからカチユア！ そんなに大口開けて笑わないで！」

小さな庭に笑い声が溢れる。

その時だった。

ガササツ。

大きな葉擦れの音がして、その場にいた全員が同時に口をつぐんで耳をすませた。

小庭を囲む生垣の向こうには、庭師たちが人目に触れないように移動するための小道がある。彼らは普段から葉擦れの音も起こさぬよう気を付けているはずだが、今の音はそんな彼らがうっかり立てたとは思えぬほど大きな音だった。

危険を感じ、場に緊張が走る。

「エミリア様、こちらへ」

シユエラはエミリアを部屋の方へ押しやって、鋭い視線を周囲に巡らせる。

その瞬間、目の前の庭木をかき分け、人が飛び込んできた。

「きゃあ！」

フィーナが思わず悲鳴を上げる。

シユエラは闖入者の姿を見たたん、そのあまりの姿に一瞬気を取られた。

泥にまみれ破れかけた衣服。目元は色あせたぼさぼさの金髪で覆われ、人相もわからなくらいに髭の伸びた男。

よくここまでたどり着くことができたものだ。王城でこのような姿をしていたら、誰かに見とがめられないはずがないのに。——そう思った瞬間、シユエラは我に返りエミリアの腕を引っ張る。

「エミリア様、早く中へ！」

守らなければ。男から目を離さず、エミリアを自分の後ろに庇いながら後退る。

男の髭が開き、わずかに口が見えた。

「エ、ミリ……」



くぐもり、かすれた声。

男の声に先に反応したのはエミリアだった。シユエラの腕を押しわけ、男のほうへふらふらと歩みを進める。

「ウイ、ル様……？」

エミリアの口から漏れたつぶやきに驚く間もなく、再び大きな葉擦れの音がする。飛び込んできたのはシグルドだった。

肩を大きく揺らして息を整えていたシグルドは、振り返った闖入者の前に膝をつく。

「よくぞご無事で。——異母兄上」

2 王太子ウイルフレッド

異母兄上——!?

その場に居合わせた者たちは息を呑んだ。

シグルドの異母兄といえは、前国王と王妃の間に生まれたかつての王太子。だがその恰好は、とてもじゃないけど王太子であった人物とは思えない。

それ以上に信じられないことがある。

王太子殿下はお亡くなりになったのではなかったの——？

あまりの衝撃に、シユエラは息をすることさえ忘れてしまう。

振り返った闖入者は、その勢いでぐらっとバランスを崩し、芝生の上に倒れ込みそうになった。

「異母兄上！」

シグルドはとっさに動いて、その体を受け止める。シグルドの腕の中で、異母兄上と呼ばれたその人は、かくんと首をのけぞらせた。

「陛下！」

生け垣の隙間からヘリオットと、続いてケヴィンが飛び込んでくる。

ケヴィンはその人の前髪をかき分け顔を確認しながら、シグルドに尋ねた。

「本当にウィルフレッド様ですか？」

「ああ。間違いない」

エミリアもそばに寄り、焦燥の面持ちで王太子の顔を覗き込む。

生け垣の向こうが次第に騒がしくなってきた。シグルドとケヴィン、そしてヘリオットがはつと顔を上げる。

「とりあえず身柄を隠しましょう」

「だがどこへ？」

焦りながら顔を見合わせるケヴィンとシグルドに、シユエラはとっさに叫んだ。

「寝室へ！」

この言葉に、全員が一斉に動き出す。

王太子を運ぼうと手を伸ばすシグルドに、ヘリオットが交代を申し出る。

「陛下は追手をごまかしておいてください」

「あ、ああ……」

場所を譲られたヘリオットは、王太子の脇の下にしつかり手を差し込み、足の方を持つたケヴィンとともに王太子を持ち上げた。侍女たちが支えるガラス張りの戸を通って室内に入ったヘリオットとケヴィンは、そのまま寝室の扉へと向かう。

続いて部屋の中へ戻ったシユエラは、寝室の入り口が外から見えないようにカーテンを引いた。隣の寝室からも侍女がカーテンを引いた音がする。

廊下に続く扉が強く叩かれる。その向こうで、衛兵が声を上げるのが聞こえた。

「大丈夫ですか!？」

「大丈夫です。入ってこないように」

マントノンは扉を押さえ、動揺を押し隠して淡々とした口調で答える。

王太子を抱えたヘリオットとケヴィンが寝室に入ったあとに、アンナに支えられたエミリアが続き、寝室の扉が閉じられる。

大きな葉擦れの音と人の声がしたのは、それとほぼ同時のことだった。

「失礼いたします! ——あ、へ、陛下」

庭木の隙間からなだれ込むように入ってきた二人の衛兵は、小庭に佇むシグルドの姿を見て、とっさにその場にひざまずいた。

「こちらで悲鳴が聞こえたようなので駆けつけたのですが」

「……その悲鳴は、ここで上がったものではない」

「は! 失礼いたしました! ここから離れた場所ですが、不審人物が発見されたようです。どうかお気をつけください」

「わかった」

ほっと肩を落として振り返ったシグルドを見て、窓辺に立っていたシユエラはぎよつとした。先ほどは王太子に気をとられ気付かなかったが、土埃まみれの王太子を抱えて

いたせいか、シグルドの上着もすっかり汚れてしまっていた。衛兵たちも突然国王と出くわしたことで余裕がなかったのだろう。気付かれなくてよかったとほっとしながら、シユエラは両手を差し出した。

「陛下、上着をくださいませ」

シグルドも自分を見下ろして驚く。

「よくこれで気付かれなかったな」

シグルドは上着を脱いでシユエラに渡す。それをマチルダが受け取り、ばたばたとたたき出した。

長袖のシャツ一枚になったシグルドと一緒に、シユエラも寝室に入る。

厚いカーテンを閉め切った寝室の中では、片隅に置かれたソファにシートが広げられ、その上に王太子が横たえられていた。

ケヴィンが脈や呼吸を確かめている横で、エミリアが泣きそうな顔をして様子を見守っている。

「素人判断ですが、病を得ているわけではないようです。ですが疲労が激しいようなので、医者診察が必要でしょう」

王太子のそばから立ち上がったエミリアが、シグルドに詰め寄ってきた。「陛下。何故亡くなったはずのウィルフレッド様が、このようなお姿で現れたのです?」シユエラはエミリアの肩に手を置く。

「エミリア様。その話はあとにしましょう。今は王太子殿下をゆっくり休ませて差し上げる用意をしなくては」

「あ……」

エミリアは己の態度を恥じてうつむく。

取り乱してしまうのも仕方のないことだ。亡くなったとばかり思っていた婚約者が生きて戻ってきて、しかもこのように変わり果てた姿になっているのでは。

「殿下には姿をお隠しいただかなくてはなりません。ですが困りました。気絶するほど衰弱なされた殿下をどちらにかくまえばいいものか」

ケヴィンが思案げにつぶやく。それに対しヘリオットは珍しく真面目な言葉を返した。「王城内も難しいな。人ひとりかくまえば、その世話をする人の流れで突き止められてしまう可能性が高い」

シユエラはふと思いついて切り出した。

「あの、それでしたらこの部屋をお使いくださいませ」

苦笑を浮かべたシグルドが、シユエラの肩に優しく手を置いた。

「いや、そなたの気持ちはありがたいが、それはよしておこう。そなたにこの部屋を空け渡してもらったところで、結局は人の出入りで怪しまれるからな」

「そうではありません。王太子殿下とご一緒に、わたくしもここで寝泊まりさせていただくのです」

「え!？」

シグルドが素つ頓狂な声を上げる。それに構わず、シユエラは自分の考えを話し出した。「わたくしが病気になったということにすれば、カーテンを一日中閉め切っけていても、お世話のために人が動いても不自然ではないはずですよ」

口をばくばくさせるシグルドをよそに、ケヴィンはわずかに驚いた顔をしてシユエラに尋ねる。

「本当によろしいのですか?」

「はい」

シユエラははっきりとうなずいた。

「ちよつと待てー!」

シグルドが慌てて口を挟もうとする。が、それをケヴィンが一蹴した。

「他に何か良い案でも？」
シグルドはぐっと押し黙る。まだ何か言いたげにしている彼に構わず、ケヴィンは話を進めた。

「ではまず医者を呼びましょう。良識があり、金品などに惑まどわされる人物ではないので、秘密が漏れる心配はありません」

「カレン」

シユエラは一番近くにいた侍女に声をかけた。

「はい。お医者様をお呼びして参ります」

カレンはすぐさま扉に向かう。シユエラはもう一人の侍女にも声をかけた。

「殿下の汚れを落として差し上げなければなりませんね。セシル、カチュアとフィーナにも言ってお湯をたくさん運んできてちょうだい」

「かしこまりました」

セシルもカレンに続いて出ていく。そこにシグルドの上着を持ったマチルダが戻ってきた。

「ケヴィン様、ヘリオット様、上着をお貸しください。お二人の上着も泥だらけです。マチルダ、お二人の上着もお願ひ。それと、殿下のご入浴のためのお支度を整えなくて

はならないですわね」

シユエラがやるべきことを次々挙げると、ケヴィンもシグルドに話しかける。

「陛下も入浴の手伝いをお願いいたします。人手が足りませんので」
控えていたアンナが、遠慮がちに申し出る。

「あの……よろしければ王妃陛下付きの者を呼びますが……」

それを聞いたケヴィンは、首を横に振った。

「ありがたいですが、やめておきましょう。王太子殿下のことは誰にも、特にラダム公爵派には知られるわけにはいきません。皆王妃陛下に忠実な者ばかりでしょうが、忠実なればこそ口止めされてもラダム公爵に報告すべきと考える者が出てきます」

「も、申し訳ありません。そこまで考えが至りませんでした……」

「お気遣いは感謝します」

ケヴィンとアンナの会話に憚はばって、シユエラは侍女から渡されたシグルドの上着を手にしてこっそり言った。

「それでは陛下の上着はこちらに置かせていただきますね」

「あ、ああ」

シユエラはベッドの脇に置かれた椅子の背に、シグルドの上着をかける。

「俺は着替えなどを自分の部屋から取ってきてみましょう。この部屋には髭ひげを剃るためののみそりなどはないですよね？」

そう言っ出ていこうとするヘリオットを、シユエラは呼び止めた。

「ヘリオット様、上着がまだ」

「あ、平気です。俺の服装、よく乱れてますから。素行の悪さはこういう時に役に立ちますよね」

「急いで戻れ」

「りょーかい」

ケヴィンの冷やかな一言におどけた口調で答えて、ヘリオットは寝室から出ていった。

それからしばらくしてお湯が運ばれてきた。

額に汗をにじませたカチュアが、得意げに報告する。

「ちょっとふざけすぎて、シユエラ様が頭からはちみつをかぶってしまったことにしました。そうしたら向こうが勝手に、『だったら落とすのになくさん湯がいるな』って言って、じゃんじゃん沸かしてくれてます」

ふざけて頭からはちみつをかぶる……とんでもなく行儀の悪い女にされてしまったようだ。でもおかげで不審がられなかったようでよかった。

カチュアたちがバスタブに湯を張っている間に、ヘリオットも戻ってきた。

「途中でおまえの配下に会って、こいつらを預かってきた」

続いて寝室に入ってきたのは、王太子と同じように汚れ、髭の伸びた二人の男性だった。

「お久しぶりでございます」

シグルドは驚きと戸惑いの混じった目で、深々と頭を下げる二人を見つめた。

「おまえたちは三年前の……？」

「はい」

「確か五人……いや、三人だったと思ったが」

シグルドの話をケヴィンは途中で遮さかる。

「陛下、話はあとにしましょう。この者たちも身綺麗にしなくてはなりません」

「あ、ああ、そうだな」

「そういうわけで、この二人の服も取ってきます」

湯を運んできたワゴンを押すカチュアたちに続いて、ヘリオットも出ていく。

「おまえたちもひどく疲れているようだ。——陛下、足のほうをお願いいたします」

腕まくりしたケヴィンとシグルドが王太子を持ち上げる。浴室に運ばれていく王太子をただじっと見送っていたエミリアに、シユエラは控えめに声をかけた。

「エミリア様、わたくしたちは応接室で待ちましょう」

「え、ええ……」

後ろ髪を引かれるように何度も振り返りながら応接室に向かうエミリアを、シユエラは複雑な思いで見つめていた。

ヘリオットは先ほどよりも短い時間で戻ってきた。

「調達したといっても私物を持ってきただけなんで。あとでケヴィンに実費を請求してやります」

軽口を叩きながら寝室に入っていくヘリオットに、シユエラは慌てて声をかける。

「殿下のご入浴がお済みになりましたら、わたくしのベッドに寝かせて差し上げてくださいます」

扉をくぐりかけたヘリオットは、振り返って驚いたようにシユエラを見る。

「よろしいのですか？」

声をかけて正解だったようだ。シユエラの申し出に意外そうな声を返したヘリオットに、シユエラは遠慮しなくていいことを重ねて伝える。

「気絶してしまわれるほど疲労なさっている方を、ソファでお休みさせるわけにはいきませんから、どうぞ。わたくしは、夜はソファで休みます」

それを聞いたヘリオットは、困ったような顔をした。

「一応お伝えしますが、陛下が許可されるかどうかはわかりませんよ？」

「え？ 何故ですか？」

首を傾げるシユエラに、ヘリオットは苦笑した。

「シユエラ様のベッドに、ご自分以外の男性が横になることを気にされるのではないかと」

確かに、自分が毎日休んでいるベッドを知らない男性に貸すのはためられる。だが今はそんなことを言っていられる状況ではない。

「わたくしは気にいたしませんと陛下にお伝えくださいませ」

「いや、気にするのは陛下のほう……まあいいか。ご伝言、承りました。それでは」

謎の言葉を残し、ヘリオットは寝室の扉の向こうに消える。

シユエラにできることはひとまず終わった。ほっと息をつき、シユエラはソファに戻る。

エミリアの対面の席に座ると、膝の上でハンカチを強く握っていたエミリアはぽつぽつとつぶやいた。

「亡くなったとお聞きしていたのに、どうして？ 何故あのようなお姿になってしまったの……？」

エミリアの目は真つ赤だった。時折目にたまった涙をハンカチで吸い、すんと鼻をすすする。

傍らに立つアンナは、混乱するエミリアを痛ましそうに見下ろしながらも、自身の困惑を隠しきれない様子だ。マチルダが淹れてくれた紅茶は、一度も口をつけられることなくローテーブルの上で冷めてしまっている。

廊下側の扉がノックされた。

「失礼いたします。お湯を運んでまいりました」

念のためにと扉を守っていたマントノン夫人が、扉を大きく開く。フィーナを先頭に、カチュア、セシルがお湯の入った瓶をいっばいに積んだワゴンを押して入ってきた。

「次のお湯が参りました。よろしいでしょうか？」

「入れ」

マチルダが先廻りをして寝室の扉の前で声をかけると、中からシグルドの声が返って

くる。扉が開き、侍女たちが次々と入っていくと、中からヘリオットの声がした。

「これでもう十分だ。お疲れ様」

「はい。厨房にるように伝えてきます」

最初に出てきたセシルが、廊下に続く扉に向かおうとする。それをマチルダが腕を引いて止めた。

「わたくしが行ってくるわ。もう休んでちょうだい」

「あ、ありがとうございます」

立ち止まったセシルの隣をすり抜けて、マチルダは廊下へと出ていく。

疲れているだろうに、残った三人の侍女たちは庭に出したテーブルと椅子を応接室に運び入れる。それが終わると、壁際のいつもの場所に整列して立った。

三人が動かなくなると、部屋の中はしんと静まり返る。

マントノンはいいつも通りの無表情で扉の前に立ち、エミリアはアンナが心配そうに見える中、青ざめた唇を固く引き結んでいる。いつもにこやかな侍女たちも表情をこわばらせ、困惑した様子で視線をさまよわせていた。おしゃべりなカチュアも、今回はさすがに口を開けないらしい。

婚約していたエミリアや接する機会があったアンナは、王太子を案じているのだろう。

けれど面識のないシユエラは、案じる気持ちより不安のほうが大きかった。本来の王位継承者が生きて戻ってきたのなら、王位はどうなるのだろうか、と。きつとカチュアたちの困惑もそこにあるのだろう。

死んだとされてきた王太子の生存。

その意味するところは、想像するだに恐ろしい。

恐ろしいけれど、何が起きているのか知りたい。でもそれを知る人は現在ここにはおらず、もしいたとしても、あまりにも重大なことであるがゆえに説明してもらえないとは限らない。

耐えがたい沈黙は、カレンに伴われてやってきた医者によって破られた。

「遅くなって申し訳ありません。衛兵の練兵場まで傷薬を届けに行っておりましてな」

事情を知らない医者おやちの鷹揚な口調は、少なからず場の緊張を解いた。

マントノンが、先ほどカチュアたちが運び入れた椅子を医者に勧める。

「こちらにおかけになってお待ちください」

「おや……？ シユエラ様はそちらにおられるようですが？」

ソファのほうに目を向けた医者おやちに、マントノンは淡々と答える。

「急病人はシユエラ様ではありません。診みていただきたい方は寝室にいらっしやいます
が、準備が整うまでお待ちください」

「患者がシユエラ様でないとしたら……はて？」

シユエラの父より少し年上に見える、灰色の髪と下がった目じりが特徴的な医者おやちは、顎あごに手を当てて首をひねった。

誰もその疑問に答えずにいると、医者おやちは気を取り直したように、シユエラの脇にしゃがんで視線を合わせた。

「あのあと、お加減はいかがですか？」

「あ、はい。おかげをもちまして、あのあとは何とも……」

シユエラは頬を赤らめ、口をにごす。

すると聞き捨てならないことを聞いたと言わんばかりの厳しい口調で、エミリアが尋ねてきた。

「シユエラ様、『あのあと』とは以前何かあったのですか？」

シユエラは口ごもりながら答えた。

「以前、その……、げ、下剤をたくさん飲んでしまったことがあって……」

エミリアは目をしばたかせた。

「シユエラ様が愛妾あいしやうになるきつかけになったあれですか？」
あれがきつかけだったと言えるのだろうか？ 寝込んだその夜、愛妾になりたいとシグルドに話しはしたけれど。

「王妃陛下もこちらにおいでだったのですね。ご機嫌うるわしく——いらっしやらないようですね。お体を悪くしておいでですか？ 先々日お伺いした折はお元氣のようでしたか？」

「少し物思いにふけていただけですから気にしないで。それよりも先にシユエラ様を診て差し上げて。あの時以来ということでしたら、もう三カ月も診察を受けてらっしやらないことになりますわ」

「いえ、わたくしは健康だけが取り柄ですので、特に診察していただくことはシユエラが辞退しようとする、エミリアはその言葉をびしゃつと遮あやつた。

「健康だからといって安心してはいけませんわ。用心に越したことはないのよ？」

用心？ 食事に何か混ぜられてないかは毎食気をつけているけど……

首を傾げつつ、傍らにしゃがむ医者者に顔を向ける。

「ちよつと目を失礼いたしますよ。……舌を出していただけますでしょうか？ ……はい、結構です。今度はお手を失礼いたします」

医者者は最後に額に手を当てて熱を確かめると、次は問診に入る。

「体がだるい、昼間でも眠気を感じるといったことはありませんか？」

「ありません」

「吐き気も？」

「はい」

「最近お食事はどうですか？」

「普通に食べています」

「お食事の好みが変わられたということは何？」

何でそんなことを聞かれるのだろうか。疑問を覚えつつ答える。

「ありませんけど？」

「これで結構です。ありがとうございます」

そう言うと、医者はエミリアのほうを向く。

「王妃陛下。今のところご懐妊かいたんの兆きざしはございませんな」

「ごっ懐妊!？」

シユエラは素すつ頓狂とんきやうな声を上げてしまう。エミリアは不思議そうな顔をした。

「毎夜陛下の訪れがあるのでしたら、いつ御子ができてもおかしくはないでしょう？」

「え、あ、そ……」

子どもができるようなことはしていません——などと言えるわけがない。

顔を真っ赤にしてしどろもどろになるシユエラを見て、照れていると勘違いしたようだ。エミリアはしようがないわねと言いたげな様子で苦笑し、マントノンに声をかけた。

「体調がすぐれない時だけお医者者を呼ぶのではなく、これからは一カ月に一回は懐妊の兆しがないか診てもらおうようにしてちょうだい」

「承知いたしました」

「あ、あのっ。そのようなお気遣いは……」

遠慮しようとする、真剣な表情をしたエミリアはきつぱりと言う。

「愛妾であるシユエラ様が御子を無事産めるよう配慮するのは、王妃としてのわたくしの務めです」

目は腫れているけれど、さっきまでとは別人のように威厳のある顔だ。英明な王妃と名高いことは聞いていたが、その理由を垣間見たような気がする。

シユエラが言葉を返せないでいると、マントノンが口を開いた。

「シユエラ様、エミリア様のおっしゃる通りです。お世継ぎをもうけられる大事な御身でございますので、今まで以上に気を配らせていただきます」

エミリアの前でこのような話をしていいのだろうか？

世継ぎをもうけるのは、本来ならば王妃であるエミリアの務めだ。エミリア自身がその務めを果たさないとやっているのだから問題はないのかもしれないが、他人の口から改めてそれを聞いて、どう思っているのだろう。

シグルドとエミリアが和解したあとも、シグルドが彼女の寝室を訪れたという話は聞かない。二人が一緒にいるところを見た限りでは、わだかまりはすっかり消えてとても仲が良さそうだったのに。

エミリアは、シユエラが彼女の心の澱を吐き出させてくれたことに大きな恩を感じているようだった。その恩を返すべく、彼女はシユエラに世継ぎを産む務めを譲ろうとしているのかもしれない。

そんな気遣いは必要ないのに。何故なら、シグルドはエミリアとの間に世継ぎをもうけることを望んでいる。エミリアが応じればそのようにすると言っていた。民はシグルドの血を引く王位継承者の誕生を待ち望んでいて、特に貴族は、それを産むのは愛妾ではなく、王妃であるのが望ましいと思っただけだ。

国王と王妃の間にあつたわだかまりがなくなつた今、愛妾はもう必要ない。激務に疲れたシグルドを癒すという務めも、幼馴染でありシグルドのことをよく知っているエミ

リアのほうが適任だ。

なのにシユエラは、今もまだ愛妾あいしよのまま王城に留まっている。

舞踏会のあと、しばらく夜の訪れをやめていたシグルドも、いつの間にか何事もなかったかのように再び毎夜訪れるようになっていた。

夜着にガウンをまとった姿で現れるシグルドは、寢室の片隅にあるソファにシユエラと並んで座り、抱きしめて口づけをする。

息継ぎのタイミングを教えられ、以前よりずっと長く口づけを続けることを覚えた。

長い口づけの最中、シグルドの大きな手のひらはシユエラの背中をさすり、頬を包み込み、首筋から胸へとまで下ろされる。その手は背中の中の丸みまでなぞることもあるけれど、シユエラは恥じらいこそすれ、驚いたり逃げ出したりすることはなくなった。

シグルドの優しい愛撫に、胸が詰まるほどの嬉しさと、身を裂かれるような切なさを感じる。

シユエラを温かく包み込んでくれるシグルドの腕は、本来シユエラのものではない。抱きしめられる度に、そのことを思い出さずにはいられない。そしてシユエラが悲しくなつて涙をこらえているのに気付くと、シグルドはその愛撫を止めてしまうのだ。

——言いたいことがあるなら言ってくれ。……受け止める覚悟はあるから。

そう言ってくれたこともある。けれどシユエラは首を横に振ることしかできない。覚悟がないのはシユエラのほうだ。

——エミリア様のところへ行くべきです。

そう言わなければならないのに、本当にシグルドがエミリアのもとへ行ってしまうのが怖い。

今もシユエラのもとを訪れてくれているのは、シグルドの優しさだ。その優しさを失うのが辛くて、シユエラは自分から別れの言葉を告げられないでいる。

それが世継ぎの誕生たうんの妨げまげになっていことはわかっている。今でもシグルドは、エミリアのことを愛しているのだから、シユエラさえいなければ二人はとっくに結ばれていただろう。

なかなか思い切れずにいたシユエラの心に、ここに来てさらなる迷いが生じた。

王太子の生還。

その事実がこの先何をもたらすのか。もたらされるものによっては、シユエラ立場も大きく変わる。不安を覚えるのと同時に、別れを先送りにできたとはっきりしている自分にもうたえた。

何を安心してるの!? この大変な時に!

シユエラは心の中で自分を叱りつけ、必死に気持ちを切り替える。死んだと思われていた人が生きて帰ってきたのは喜ばしいことだし、今考えるべきなのは衰弱のあまり気絶してしまった王太子の体調だ。それに目の前にいるエミリアを支えなくては。

先ほど毅然とした態度でシユエラに意見したエミリアは、医者が席に落ち着くとすぐにまた悄然とした面持ちでうつむいてしまった。シユエラは立ち上がりエミリアの横に座ると、膝の上にある彼女の手に自分の手を重ねる。

「大丈夫です。ここまですり着くことができたのですから、きっと気が緩まれただけですわ」

小さく、けれど力強く語りかけると、エミリアは少しだけ顔を上げて、ほっとしたようにかすかに微笑んだ。

しばらくして、マチルダがまた冷め切ってしまったお茶を淹れ直している間に、寝室の扉が静かに開いた。

最初に出てきたのはケヴィンだった。

「シユエラ様、ベッドをお貸しくださってありがとうございます」

シユエラはエミリアと一緒に立ち上がりながら答える。

「いえ、それは当然のことを申し上げたまで……」

するとケヴィンは何故か寝室のほうへ意味深な視線を向ける。すると彼の後ろからふてくされた様子のシグルドが出てきて、シユエラと目を合わせないまま口を開いた。

「……余も礼を言う」

「え……あ、はい。どういたしまして」

何故不機嫌なのかさっぱりわからず、困惑のあまり国王に対して使うのはどうかというような気安い言葉を返してしまう。

ケヴィンは医者に目を向けた。

「すでに来ていただいていたのですね。お待ちせしました。お願いいたします」

「はい、承りました」

医者は「よっこらしよ」と言いながら立ち上がった。革の鞆を重たそうに持ち上げて、ひよこひよここと寝室に向かう。

「さ、て、と。わたしの患者はどなたかな？」

どなたなのか知ったら、そんな風におどけていられなくなるだろう。

ケヴィンは医者と一緒に寝室に入る。

「陛下、ウィルフレッド様は……」

扉が閉まってすぐ、エミリアは応接室に残ったシグルドに近寄って尋ねる。

「入浴の最中に一度目を覚まされた。……すぐに気を失ってしまわれたが」

「そう、ですか……」

他にも聞きたいことがあるだろうに、でもどのように尋ねたらいいのかわからない様子で、エミリアはうつむいてシグルドから目を逸らす。

シグルドは困ったような、弱々しい笑みをエミリアに向けた。

「何故、と聞きたいだろうな」

「はい……」

エミリアが答えると、シグルドは部屋の中にいる全員を見回した。

「ここにいる者たちには説明しよう」

シグルドとエミリア、そしてシユエラがテーブルに着くと、新しく淹れられたお茶がテーブルに並べられる。侍女たちがお茶の給仕を終えて整列したところで、シグルドは話し始めた。

3 王太子はいかにして生還したか

王位継承を巡って勃発した内乱に他国が介入することで泥沼の戦場と化した、隣国レシュテンウィッツ王国。

介入していた国の一つであるラウシュリッツ王国が軍を引くことになったのは、国王と王太子が同時に死去したことがきっかけだった。

「だが、異母兄上にうえが生きて戻ってきたことからわかるように、我々は異母兄上の死を確認したわけではなかった。国王陛下の死の知らせが入った段階では、行方不明になったという報告を受けただけだ。国王陛下の戦死は兵士たちに激しい動揺をもたらし、軍は大きく乱れていた。指揮官不在の状況が続けば、軍はさらなる損害をこうむることになる。知らせを受け取った余は、すぐさま総指揮官の名乗りを上げ軍の立て直しを図った」シグルドが立て直すまでに軍でどれほど痛ましいことがあったのか、その沈痛な面持ちから窺うかがい知れる。

王都にいたら伝聞でしか知る由のない戦場のこと。ラダム公爵にしてみれば、国王の死と王太子の行方不明はシグルドの陰謀であったほうが都合がよい。そのように真実をねじ曲げられ貴族たちの間に広められてしまったら、ラダム公爵にすり寄る貴族たちはこそぞつてそれを信じるだろう。それを否定できる確たる証拠を提示できないシグルドは、弑逆者として断罪されることになる。

となればシグルドのそばに立つケヴィンも同罪だ。二人とも王位継承権を剥奪され、彼らに次ぐ継承権を持つラダム公爵の孫が国王になることになる。しかしその者はまだ幼いため、その後見につくラダム公爵が実質的な国の支配者となるだろう。

ラダム公爵も、自分が国を治めることになればこの侵略が国益を損ねるものだと気付いたかもしれない。だが、それまでの期間に被る多大な損害を考えれば、謂れなき罪によつて軍の指揮権を奪われるわけにはいかなかった。

王太子の行方は、シグルドが撤退を終え、敵が軍を引いたあとでも知れなかった。敵味方入り交じった混乱の中、王太子の馬が倒れたところまでは目撃されている。だが、そこを中心に戦場となった場所をくまなく搜索させても、その姿は発見できなかった。

敵軍が捕虜にしたと言つてこないことから考えても、王太子は死んだと見て間違いない。

ない。

そこでケヴィンや主だった貴族たちは一計を案じ、戦場にいるラダム公爵派の貴族を納得させるため、背恰好の似た戦死者を王太子の遺体として仕立て上げ埋葬した。

それと同時に、王太子も国王とともに死去したという報告を急ぎ王都にいるクリフォード公爵に届け、ラダム公爵が手を打つ前に、シグルドが王位に就く算段を整えてもらったのだった。

「余の知らないところで行われたことであつたが、彼らを責めるつもりはない。ラダム公爵の好きにさせないためには必要なことであつたし、最終的に余も受け入れた。あれから三年が経ち国が安定してきた今なら、ラダム公爵らの言及を抑えこめる準備が整いさえすれば公表することもできよう。だが不用意にこのことが漏れれば、そのことを執拗に追及するラダム公爵らと、余を擁するクリフォード公爵をはじめとした一派との間に大きな争いが起こり、国中が大混乱に陥るのは容易に想像がつく。そのため、クリフォード公爵にも異母兄上の生存の可能性を知らせなかった。知っているのは、ケヴィンやヘリオット、軍の上層部の一部、この件に協力した数名の近衛隊士だけだ。——このことを今話したのは、そなたたちならばこれがいかに重大なことであるか理解し得る

であろうし、決して口外しないと信用しているからだ。だが、秘密はどのようにして漏れるかわからない。よって命じる」

シグルドに鋭い視線を向けられて、五人の侍女たちは息を呑み、女官のマントノンとアンナはいつも以上に表情を引きしめる。シュエラとエミリアはシグルドをしつかりと見つめて、次の言葉を待った。

シグルドは大きく息を吸い、命令した。

「これに関する話は、この部屋以外では絶対に口にしてはならない。たとえこの場にいる者たちしかいない場であっても許さない。もちろん、手紙など書面に書き付けることも一切禁する。この命令は、異母兄上あにょうえの生存を公おおやけにする日が来るまで有効であると心得よ」「心得ました」「かしこまりました」

命令を受けた全員の声が重なる。シグルドはもう一度全員の顔を見渡してうなずいた。「話を続けよう。——そうして余は国王になったが、異母兄上あにょうえのことはあきらめられなかった。国王になるため帰国する直前に、生存をしぞく示唆する情報もたらされたからだ」

先ほどヘリオットが連れてきたのは、その情報をもたらした五人のうちの二人だった。彼らは王太子を守っていた親衛隊士だと名乗った。

戦場で王族を守るために、身分を問わず剣の腕の立つ者だけで結成された親衛隊。その隊士だった彼らは、王太子に大きな恩を受けたと言って、彼の救出を願いついだ。

混戦のさなか、落馬した王太子が何者かに連れ去られたところを見たというのだ。

生存の可能性があるのなら、何としても助きたい。だが、誰がどこへ連れ去ったかわからず、いつ救い出せるかも定かでないのなら、やはりラダム公爵の思いつほだ。そこで王太子の生存の可能性を伏せたまま、彼ら五人が極秘に搜索することになった。

その搜索の手助けをし、彼らから報告を受けるためにケヴィンの配下——アノンという者が戦場に留まることが決まる。そこまでの手配が済んだところで、シグルドは後ろ髪を引かれながらも王都へと向かった。

「エミリアには異母兄上が生きているかもしれないことを伝えたかったのだが、取り乱されて他者に知られてしまったらと思うとできなかつた」

すまなそうな顔をするシグルドに、エミリアは力なく笑った。

「正しいご判断だったと思います。先ほどでさえ、わたくしは取り乱してしまつたのですから」

「ともかくすまなかつた。——そうして元親衛隊士五人による異母兄上の搜索が始まっ

た。彼らによると、戦場では各国の身分の高い者を捕えて回る、奇妙な一団が暗躍しているというのだ。どうやら異母兄上はその者らに捕まったらしい」

「奇妙な一団とは？」

エミリアが今さっきの弱々しい表情を改め、真剣な面持ちでシグルドに尋ねる。シグルドもその件を深刻に捉えているのか、難しい顔をして答えた。

「異母兄上の搜索とは別に調査の者を出していたが、彼らは自らの身元を示す物は何も持たず、それなりの規模の集団であるにもかかわらず未だにどこものつながりも見つけられていない。正体に心あたりがないでもないが、確証は得ていない段階でな。ともかく、異母兄上が生きているのならその集団に囚われているはずだということまで突き止め、彼らはさらに探りを入れ続けた」

今も続く隣国の戦乱。その中を謎の一団は頻繁に移動し、早い時は一晩で野営地を撤収してしまう。そのため本当に王太子が彼らに捕えられているのかすら、なかなか掴むことができなかった。彼らは激戦区の間際を好んで移動するため、搜索は危険極まりないものとなり、搜索に当たった五人のうち二人は死亡したという。そして一年ほど前、残りの三人も報告に現れなくなるとアノンから報告があった。

それでもあきらめきれなかったシグルドはケヴィンに、アノンを一年間戦場に留まらせるから、その間に彼らからの連絡がなかったら搜索を打ち切ると言われてしまった。

あれからもう一年近く、シグルドも実のところあきらめかけていた。

だが今日になって、戦場にいたはずのアノンが突然王城に現れ、王太子が生きている追手から逃れるために王城に入ったと報告してきた。

「余が駆けつける前に異母兄上たちは衛兵に見つかり、あの元親衛隊士たちは衛兵を引きつけるために別方向に走ったあと、一人になった異母兄上はこの庭にたどり着いたのだそうだ」

ようやく話し終えたシグルドは、疲れ切った様子で深く長いため息をついた。

新しく淹れられた紅茶も、三人の目の前で冷えてしまった。

話が終わって少しした頃、寝室から人が出てきた。ケヴィンと医者と、王太子の搜索にあたっていたという元親衛隊士の二人。

医者は王太子の生存を知っておどけてもいられなくなったようで、神妙な顔をしてシグルドの前に立ち報告を始める。

「ご病気やお怪我はないようです。ですから過労でしょう。虜囚生活と逃亡生活が長く、食事をあまり召し上がっていないそうなので、栄養失調にも陥っていらっしやるかと思えます。ですが最初から栄養のあるものを差し上げては体が受けつけませんので、軽い食事から少しずつ差し上げてください。何かございましたらご連絡を。真夜中でも参上いたしますので」

深々と頭を下げ、未だ放心状態から抜け切れない様子で退室しようとする医者に、ケヴィンは声をかける。

「何度も申し上げますが、くれぐれも内密に願います」

医者はびくっと背筋を伸ばし、ケヴィンを振り返った。

「そ、それはもう……賢明な判断が下されるのを願うばかりです」

もう一度頭を下げて、医者は帰っていった。

扉が閉まったところで、ケヴィンはシユエラのほうを向いた。

「申し訳ないのですが、侍女を看病にお借りしてもよろしいでしょうか？」

シユエラが返事をする前に、エミリアが立ち上がる。

「わたくしにさせてください」

「申し訳ありません。今後の話がありますので、こちらの部屋にお留まりください」

ケヴィンが事務的に答えると、エミリアはしゅんとして椅子に座り直した。王太子のそばにいたいのだろうけど、まずは話を終わらせなければならぬ。

「わたくしが参ります」

セシルが代わりに名乗りを上げ、寝室に入ってしまった。

扉が閉まったところで、ケヴィンがシグルドに話しかける。

「陛下、説明のほうは」

「余の知る限りは終わった。おまえたちの報告を聞こう」

声をかけられ、ヘリオットに連れられてこの部屋にやってきた二人がシグルドの前に出た。

年の頃はケヴィンやヘリオットと同じくらいだろうか。髭をすっかり剃り落とし、髪を短く整えてはいるものの、頬はやせこけ、顔色は青ざめているのを通り越してどす黒く、目はうつろだった。

シユエラは彼らに席を譲りたくなる。が、その前にシグルドが口を開いた。

「そなたらにも休息が必要のようだな。異母兄上の救出直前までは報告を受けている。その後のことを手短かに報告せよ」

「は」

一方の男性が軽く頭を下げながら短く返事をし、報告を始める。

王太子を救出したのはおよそ一年前、謎の一人が何らかの理由で激戦区を離れてしばらくしてからのことだった。何とか突き止めた彼らの仮の拠点の警備の隙を突いて、仲間一人が王太子と入れ替わったのだ。

だが、追跡はあまりに執拗だった。二年にわたる虜囚生活で衰えた王太子を抱え、戦禍に巻かれた街や村を逃げ回るうちに、持っていた食料も底をついた。それでも奇跡的に、アノンと約束していた場所までたどり着くことができた。

アノンは追われていると聞くと、すぐにその場から発つことを決めた。森や林、時に戦禍を逃れ旅をする人々に紛れ込んで追手を撒き、ようやく国境にたどり着いたのが約一カ月前のことだった。

国境は、同行者も不問で通ることのできる特別な通行証をアノンが持っていたため、難なく通過できた。

ところがその際に、元親衛隊士二人は顔見知りの国境警備兵に偶然行き合ってしまう。その人物は除隊したはずの二人が国境にいることをいぶかしみ、同行者に目を向けた。

万が一のことを考え王太子はマントのフードを深くかぶり隊士たちの陰に隠れるよう

にしていたのだが、それで逆に疑われてしまったらしい。その時はアノンの通行証を盾にしのだが、国境のある峠より人里に下りた頃から、アノンたちを追う人々が現れ始めた。

国境で行き合った人物は、二人が王太子の生存を主張していたのを知っている。その話が広まって捜索が開始された可能性がある。

その事実関係を確かめている暇はなかった。ラダム公爵に王太子が生きていることを知られないためにも、彼の手の者に捕まってはならない。そこから再び逃亡生活が始まった。

「途中で悪いのだけど、一つだけ聞かせて。正しい判断だったとわたくしも思いますが、ウィルフレッド様はラダム公爵の後見を持つお方。なのに何故、あなた方は公爵に知られてはならないと思ったの？」

不意にエミリアが声をかける。見るからに高貴な女性に声をかけられて戸惑った元親衛隊士に、ケヴィンが抑揚のない声で告げた。

「王妃陛下であらせられる。ご質問にお答えするように」

「——！ はっ」

隊士は驚きながらもかしこまって、質問に答えた。

「シグルド国王陛下とケヴィン様より、ラダム公爵には決して知られないよう命令を受けておりました。それだけでなく、王太子殿下の御身柄がラダム公爵の手に渡り、再び侵略戦争が始まるのを阻止したからです。国王陛下が終わらせてくださったあの不毛な戦争を、二度と繰り返してはならないと我々も考えております。王太子殿下もそのことにご同意なされ、搜索の手をかくぐりながら王都を目指すこととなりました」

王都に近付くにつれ追手の数は増え、そのうち食料を手に入れるために街や村に近付くこともできなくなつた。そのため、残りわずかな食料を食いつなぎ野宿を繰り返しながら、王都まであと一歩というところまでたどり着く。

しかし包囲網はかなり狭まつており、王都に足を踏み入れたところですがすぐに捕まってしまう危険性があつた。その時、王太子が一つの道を示したのだ。

ラウシュリッツ王国の王城は小高い丘の上に建つており、北から東にかけては城壁のすぐ下が急な斜面になつていたので、王都の街は南から西の方向に広がつてゐる。

そしてかつて砦だつた王城には抜け道が存在し、そのうちの一つが東の急斜面のふもとにある草原から、北館前の入り組んだ庭園の一角へと続いていた。

「そうしてようやく追手から逃れられたのに、うかつなことをしてしまいました。抜け道の中でアノン殿が戻ってくるのを待っていたればよかったのに、もうすぐ逃亡生活から解放されるといふ気の緩みから暗い抜け道を出て王城内に侵入し、その物音で衛兵に気付かれ、追われることとなつてしまいました。王太子殿下をお隠すために我々が二手に分かれて追手を引きつけたのですが、大変な失態を犯してしまい、申し訳、ありません」

元親衛隊士の言葉が終わりにかけて切れ切れになる。立つてゐるのもやつとな様子に、シユエラは思わず席を立つ。

「ソファに座つて休憩を……」

ヘリオットが苦笑しながらそれを止めた。

「シユエラ様、それはマズいです。おまえらは今座つたりしたら、しばらく動けなくなるだろ?」

「は……」

声をかけられ、元親衛隊士が吐息のような返事をする。

「これ以上この部屋にかくまう男を増やしたら、陛下が怒つちやいますよ、シユエラ様」

「いらんことを言うな、ヘリオット！」

シグルドが苛立たしげに怒鳴る。

ずつとかくまうつもりではなく、少し休んでから移動したらいいのではと思っただけなのに、何故そういう話になってシグルドが怒り出したのかわからない。

きよとんとしながら黙ってしまったシユエラを見てはつが悪くなったのか、シグルドはごまかすように笑みを向けてくる。

場の雰囲気が悪くなったことが気にならなかったのか、ケヴィンはヘリオットに声をかけた。

「ヘリオット、とりあえず侍従棟にあるおまえの部屋でこの二人をかくまえ。夜になったら馬車を呼び、我が家に引き取る」

「りよーかい。じゃ、行こうか」

ヘリオットにうながされ、二人は庭のある窓辺へと歩き出す。すると一人の体がぐらりと傾いだ。

シユエラが声を上げる間もなく、ヘリオットが彼を片腕で支える。

「おいおい。まだ気絶してくれるなよ？　いくら身綺麗にしたところで、気絶した男をかついで歩いたら悪目立ちするからな」

「は……申し訳、ありません」

ヘリオットは二人を外へ行かせ、ふと振り返った。

「あ、それから侵入者騒ぎも適当に言って静めてきます。陛下に撒かれてしまった侍従たちも、まだ大慌てで捜している最中でしょうし」

「任せた」

シグルドの返事にヘリオットはにっと笑って応え、先に庭へ下りた二人と一緒に生け垣の向こうへ消える。

葉擦れの音がしなくなったところで、シグルドは考え込むように顎にこぶしを当てて言った。

「国境から王都まで異母兄上たちを追っていた者たちというのは、ラダム公爵の手の者だろうか？」

「おそらくそうでしょう。でなければ、我々が関知しなかったはずがありません。ラダム公爵は、殿下を救出し我が国へ連れ帰ったのが我々の手の者であることを知らないと思われます。殿下らしき人物が目撃されたという情報を頼りに人手を出して捜索し、身柄を確保できたところで、殿下の生存を発表し我々を糾弾する心づもりかと。目撃情報だけで我々を追及したところで、世迷言と突っぱねられるだけ。それだけでなく、我々

に事前情報を与え対策を練る猶予を与えてしまうと考え、敢えて内密にしていると考えられます。——ところで、今後はお呼びする時も気をつけたほうがよろしいかと。シユエラ様のご病気だということを理由に近辺の警護を強化いたしますが、物々しさに好奇心を持った警護の者たちが聞き耳を立てぬとも限りません。今後、かの方のことは……そうですね、ウイル様とお呼びしましょう。略名にしてしまえば人物を特定しづらくなり、聞かれてしまっても言い逃れができます」

シグルドの問いにケヴィンが答え終えたところで、カチュアが大きく手を上げた。

「あの！ 一つお伺いしたいのですけど！」

「カチュアっ」

フィーナが慌てて止めようとする。が、シグルドは手を上げてフィーナを制した。

「構わない。何を聞きたい？」

フィーナは恐縮して一歩下がるが、カチュアは許可を得て調子に乗ったのか、勢い込んで尋ねる。

「こちらでウイル様をかくまうことになりましたが、この先はどうなさるおつもりですか？ 王位はどうなるんです？」

ここまで突っ込んだ質問をされるとは、シグルドも思わなかったらしい。

「それは——」

口ごもったシグルドに代わって、ケヴィンがこの場にいる全員に向けて答えた。

「まずはウイル様が回復されてからです。ただ、今言えることは、この国はすでに陛下——シグルド国王を中心に回り始めています。そこに、本来ならば王位を継いでいたはずの方が戻ってきたということになると、現国王陛下を支持する貴族と、ウイル様を支持する貴族との間で対立が生まれます。生存を公表するとしても、まずウイル様に回復していただき、それから今後のことを我々の間で相談してからです。それもせず下手に動けば、どのような事態が引き起こされるかわかりません。——先ほど陛下よりお話があったと思いますが、わたしからも申し上げます。ここにいる全員が、この国に隣国で起こっているような戦乱を引き起こしかねない重大な秘密を知っていることを自覚して、軽はずみな言動をしないよう注意していただきたい。特に王妃陛下、アンナ殿、ラダム公爵派の真つただ中に身を置くお二人には、周りの者に悟られぬよう重々注意をお願いいたします」

「はい。承知いたしましたわ」「しかと承ります」

落ち着いたエミリアの返答と、少しばかり意気込んだアンナの返答が重なる。

「マントノン夫人」